

まえがき



(2021)

もう 60 年前からの事だが、僕の傍らにはいつも「二十歳のエチュード」(原口統三)があった。

今や古ぼけた小さな文庫本だが、高校生から大学生にかけての下宿生活・間借生活の時さえ、手放さず折を見ては眺めていた。

原口統三は第一高等学校の仏文に学び、学校の寄宿舎に閉じこもりランボーやボードレールの詩とショパンの音楽にのめり込みながら、「精神の純潔さ」をひたすら追い求めていた。

時は、第二次大戦終戦間際の大混乱の時代にあって、青春真っ只中にありながら、

行き着いたその最終の結論が 19 歳と 10 カ月という若さでの伊豆の海での自死であった。

寄宿舎で生活を共にした彼の 2 歳先輩の清岡卓行氏の「海の瞳」に、死に至るまでの経緯・レクイエムが詳しく述べられている。

僕も大学へ入り教養部の頃から第二外国語にフランス語を選択していた事もあり、

なぜか惹かれることも多く共感できた・・・とは言っても「自死等考える暇もなかったが・・・。

そのフランス語を選んだのは、建築学科 30 名と土木学科 50 名の中でたったの3名！！

授業は当時国内でも著名であった城野節子先生で、生徒はたった3人という

まったく贅沢な授業であった。期末の試験もしなければならない、・・・大きな教室の教壇に

静かに座っておられたが、先生のお邪魔をしては悪いと思い、3人は机の引き出しを音の

しないようにゆっくり開け、参考書を静かに見ながら、時には3人ヒソヒソ小声で話し合いながら、

厳粛な試験を終えた。

幸いにもフランス語はその後の僕の人生に大いに役立ったと感謝するばかりだ。

30台後半に経験した海外赴任中にも何人かのフランスからの指導員と同じ宿舎

で生活していたが日々の挨拶をフランス語で交わすのはとても心地良かった、とはいえ日常会話を・・・と言われる

と??

会社員時代、カラオケではフランス語で「枯葉」が歌うのが僕の唯一の特技だった。そんな「二十歳のエチュード」

へのオマージュから、こんなタイトルを選ばせてもらったのだ、恐らく百人の内、肯いてくれる人は3人もいないだろうけど・・・それでも僕は、この書を「・・・エチュード」とさせて頂きたい。

内容の建築・絵画・エッセイ・俳句・詩・写真等は、10 代後半から今迄60年間のストックがパソコンに残っており、折を見ては会社の社内報、高校・大学の同窓会誌、建築士会機関紙・・・等に掲載して頂いたものである。

今の時代から見ると些か時代遅れの感も見え隠れする。